

医療福祉研究実用化システム構築調査専門委員会 設置趣意書

システム技術委員会

1. 目的

本調査専門委員会では、医療福祉研究の実用化を推進するために、実用化支援システムの提案をすることを目的とする。研究開始段階から研究継続段階、臨床試験段階、医療・福祉現場への導入段階の4段階において、医療機関と研究機関のマッチングや、ニーズとシーズのずれ違いの防止等を実現するため、医療・福祉・工学の専門家同士の意見交換が可能なシステムを提案する。具体的には、医療従事者が行う工学技術の必要な研究への工学研究者による知識・技術提供、および、工学研究者が行う医療・福祉知識や被験者の必要な研究への医療・福祉専門家の知識提供・被験者紹介等が、活発に行われるシステム構築を目指す。特に、従来の研究題目の掲示やタグ付けによる紹介方式のみに留まらず、研究内容や過去の共同研究等から、自動的に最適なマッチングを推奨できるシステムの構築を目指す。

2. 背景および内外機関における調査活動

世界に先駆けて超高齢社会を迎えた日本では、国の方針としての医療費抑制や、患者数の急激な増大に起因する人員不足などによって医療・福祉分野における問題が多数表面化しており、工学の立場からの貢献が期待されている。これに対し、工学と医療・福祉の融合を目指した様々な研究がなされ、華々しい結果が学会で報告されている。しかし、それらの研究が実際に医療・福祉の臨床現場で活かされているかと問えば、必ずしもそうとは言えない。

この問題は、医療側からのニーズと、工学側のシーズがうまくマッチしていない事などが原因だと早期から指摘されてきた。個々の研究においては、この原因を理解し、成功する例も出てきているものの、いまだその問題自体の根本的解決には至っておらず、工学としての貢献が計画通りには進まないまま、刻一刻と国の高齢化率が上昇の一途をたどっている。

この現状に対して、NEDOの生活支援ロボット実用化プロジェクトや、厚生労働省における障害者自立支援機器等開発促進事業など、個々の研究に対して重点を置いた支援プロジェクトが行われている。テクノエイド協会では患者からの声を吸い上げるシステムも構築している。しかし使用者と工学研究者の認識には壁が存在し、実際に必要な仕様の理解が進まないなどの問題も多い。また、日本医工ものづくりコモンズでは、ロボット、機器に特化した臨床医学と工学との意見交換の場が設けられている。これに対し、本提案では医療福祉にかかわる研究のうち、ものづくりそのものが技術課題ではない研究について、研究の各段階において医療機関と工学の研究機関のマッチング等を目指している。また、既存のマッチング方式ではいちいち提案を確認しないとならない、或いはタグ付けによって膨大な提案が送付され、目を通さなくなるなどの問題がある。これらのことから、研究初期段階から医療・福祉と工学間の最適なパートナーと、双方向の情報の交換を可能なシステムの提案を目指す本調査専門委員会の意義は大きい。

3. 調査検討事項

- 1) 研究開始時のニーズの把握方法の検討
- 2) 倫理審査も含めた研究継続時の軌道修正方法の検討
- 3) 研究の目的に沿う被験者の効率的な募集システムの検討
- 4) 研究成果を必要としている現場とのマッチングシステムの検討

4. 予想される効果

医療福祉研究のスピードアップはもちろん、これから行われる医療・福祉研究の中で、ニーズと合致しない研究や、研究継続中に現場のニーズからの逸脱が起こることを低減する。また、産み出された研究成果を必要としている現場への導入が促進される。

5. 調査期間

平成 26 年 (2014 年) 5 月～平成 28 年 (2016 年) 4 月

6. 活動予定

委員会 3 回／年 幹事会 2 回／年

7. 報告形態

C 部門大会企画セッションでの発表をもって報告とする。